

自分史における「虚構」

——鈴木政子『わたしの赤ちゃん』を中心に——

釋 七月子

はじめに

自分史を公にすると、なぜ虚構が入ってしまうのか、あるいはなぜ虚構が必要になるのだろうか。

自分史には大きく分けて「記録としての自分史」と「物語としての自分史」の二つがある。「記録としての自分史」は日記やメモ、資料などを基にして、過去の出来事や経験をできるだけ正確に再現し、後世に残すことを大きな目的としている。それゆえ、ほぼ事実に近いと考えられる。しかし「虚構」という側面に目を向けると、記憶の曖昧さや記憶の上書きの問題、さらに自分史は人生を振り返って書くがゆえに、過去の出来事を書いている(いま)の時点での見方・考え方が作品に反映するという問題を孕んでいる。一方「物語としての自分史」は、物語性を重視するがゆえに、作品の中に「虚構」が入り込むことを否定することはできない。

本稿では、鈴木政子著『わたしの赤ちゃん』(学習研究社、2008年)の分析を通して、物語性を重視した「自分史」の「虚構」について考える。さらに、記録性の高い自分史においても虚構は避けられない問題であることにも言及したいと考える。

鈴木政子について扱っている先行研究としては、次の二つの論文があげられる。ひとつは小林多寿子『物語られる「人生」自分史を書くということ』(学陽書房、1997年)である。ここでは「ともに書く自分史」として、鈴木の自分史教室の取り組みを紹介している。鈴木の実践から、自分史コミュニティ=書くコミュニティ=読むコミュニティであるとし、『『人生』のストーリーの生産者と読者がともに自分史コミュニティをつくりあげる』と結論づけている。鈴木の実践から、自分史コミュニティ=書くコミュニティ=読むコミュニティであるとし、『『人生』のストーリーの生産者と読者がともに自分史コミュニティをつくりあげる』と結論づけている。鈴木の作品としては、『あの日夕焼け——母さんの太平洋戦争』(立風書房、1980年→彩図社、平成12年、以下、『あの日夕焼け』と記す)と『満州そして私の無言の旅』(立風書房、1987年)の2冊を取り上げて、前者は鈴木の人生にとって、もっとも重要なターニングポイントの一つであったとし、後者は歴史の学び直しによって、新しい展開を切り開いた一冊と述べている。しかし、鈴木の作品の分析は直接には行っていない。もう一つは、塚田守『『戦争体験』の語り継ぎ——自分史作品の分析から』(『椋山女学園大学研究論文集』第40号(社会科学篇)、2009年)である。「十歳代で何らかの「戦争体験」を持ったものは、その影響を人生の後まで受ける傾向がある」とし、「その人たちが自分史の中で語る「戦争体験」を分析し、今後も「戦争体験」が語り継がれる意味について考察」している。三人の著者を研究対象としており、その内の一人として鈴木政子(引揚げ体験の例)を取り上げている。鈴木の二つの作品(『あの日夕焼け』『満州そして私の無言の旅』)を参照し、鈴木が戦争体験を語るに至った過程を明らかにしているが、作品に踏み込んだ分析はなされていない。

小林の著書『物語られる「人生」自分史を書くということ』が出版された時点では、まだ『わたしの赤ちゃん』は書かれていなかった。また塚田の論文では、『わたしの赤ちゃん』に関しては全く触れられていない。『あの日夕焼け』は子ども向けに書かれてはいるものの、ほぼ事実と考えてよい。また『満州そして私の無言の旅』は、鈴木本文字通りの自分史である。それゆえ、両先行研究では、本稿で取り上げる自分史の「虚構」については言及されていない。

1. 自分史の概略と鈴木政子の紹介

自分史の源流にまでさかのぼっていくと、「ありのままに書く」ことを重視した戦前の生活綴方に行き着くが、ここでは自分史誕生の直接の源である「ふだん記」運動について簡単に言及する。

昭和33(1958)年、八王子在住で、地方文化研究、婦人回覧誌の編集などをしてきた橋本義夫は、日頃世の中の表舞台に立つことのない普通の人たちがふだん着で集まり、皆でお喋りしたり書いたりする庶民の文章運動を始めた。それが「ふだん記」運動である。戦前の生活綴方運動の系譜上にある、大人のための生活綴方運動の一形態と考えられる。しかしそのときは橋本の意図は達成されず、十年ほどで失敗に終わった。昭和42(1967)年、橋本は文章運動を再開する。オイルショックにより人々の関心が心の充実に移ってきたことが後押しとなり、今度は会員数も次第に増え、各地域に支部のようなものができるまでに全国的広がりを見せた。

橋本は書きためた文章を本にすることを勧めた。グループ誌や『ふだん記本』(自分の書いた原稿がたまってきたところで、自分だけの本を出版)などの刊行がそれである。また表現方法は様々で、文章だけではなく、スケッチ、絵、詩なども「ふだん記」の中に含まれている。いろいろな自己表現を受け入れる「ふだん記」の中には、自分が今まで生きていて忘れられない出来事、どうしても書き残しておきたい記録、個人史・ライフヒストリーなども当然存在する。それらの記述の中で、歴史との接点を見いだせる作品に、歴史家である色川大吉は注目した。色川が民衆史として理論化した概念とそれを表す造語「自分史」とが結びついたとき、一次はブームとまで言われ、その後も消えることなく現在も書き続けられている「自分史」が誕生したのである。

本稿で分析を試みる『わたしの赤ちゃん』の著者・鈴木政子も「ふだん記」の出身者である。鈴木は「ふだん記グループ」の主催者・橋本義夫を尊敬し、仲間とともに「ふだん記茅ヶ崎グループ」を創設する。文集『茅ヶ崎ふだんぎ』を発行し、自らもその中で多くの作品を発表している¹。

ところで「自分史」という言葉は、昭和50(1975)年に出版された色川大吉の『ある昭和史——自分史の試み』ではじめて使われたとされている。「ふだん記」運動の中の歴史的眼差しに支えられた自己表現と切り結んだ部分、それを歴史学者である色川は「自分史」と名付けた。

「ふだん記」運動の一環として出発した自分史は、1980年代半ばに到るとその様相を大きく転換する。この時期にワープロが登場し、自分史を出版するための出版シス

1

昭和52(1977)年9月28日、ふだんぎ茅ヶ崎グループを発足。同年12月1日、『茅ヶ崎ふだんぎ』創刊号を発行する。

テムや、自分史の書き方を指導する自分史講座などの自分史作り支援サービスが確立された。その後自分史は、これらの支援システムの下に拡大・定着していくこととなる。

1990年代に入ると、「自費出版図書館」や「自分史図書館」も開設される。また平成2(1990)年には「北九州市自分史文学賞」が、平成8(1996)年には「日本自分史大賞」が創設される。他にも自治体や協会で自分史関係の公募が行われている。

このように、1980年代半ばの大きな転換期を経て、比較的簡単に誰でも自分史を書き、自費出版できる条件が整った。さらに、賞を目指して書く自分史も現れるようになってきた。

ここで、本稿で扱う鈴木政子について簡単に触れたいと思う。鈴木は十歳のとき、外地・満州で敗戦をむかえる。ソ連兵を先頭にした暴徒に襲われ、その後収容所生活を余儀なくされる。そこで、生後三ヶ月の弟と三歳の妹を亡くしてしまう。厳しい冬の前に、無事錦州へ脱出することができたが、そこで待ちかまえていたものは、十歳の少女には過酷すぎる生活だった。ここでも七歳の弟・満^{みつる}と一歳の妹が亡くなっている。この悲惨な体験が、鈴木の自分史の原点と考えられる。

先にも少し触れたように、鈴木が本格的に文章を書き始めるのは、「ふだん記」に参加してからである²。現在は文章教室・自分史講師、フリーライターの肩書きを持っている。鈴木は今までに6冊の本を出版している。またローカルではあるが、三つの賞を獲得している。本稿で扱うのは鈴木の自分史である『あの日夕焼け』、『満州そして私の無言の旅』、『「舎監せんせい」——集団就職の子どもたちと共に——』（新風舎、2000年、以下、『舎監せんせい』と記す）、『わたしの赤ちゃん』の4冊である³。『舎監せんせい』は1999年に出版フォーラム・自分史コンテスト最優秀賞を受賞しているが、実はこの作品には北九州市自分史文学賞に応募し、落選したという経緯がある。『わたしの赤ちゃん』は、第18回北九州市自分史文学賞大賞受賞作である。

2. 北九州市自分史文学賞大賞作『わたしの赤ちゃん』

この章では、北九州市自分史文学賞の概略と、本稿で扱う『わたしの赤ちゃん』の審査評を見ていく。『わたしの赤ちゃん』は一般にはあまり知られていないので、ここで簡単なあらすじを紹介したい。

主人公・千代は子守として進藤家とともに満州に渡り、終戦をむかえる。大虎山収容所での生活を余儀なくされるが、そこで、ソ連兵や中国兵に強姦され妊娠してしまう。収容所から脱出し錦州へ、そして引き揚げ船で博多に上陸する。「女性だけの身体検査」を受け、「厚生省博多引揚援護局保養所(二日市保養所)」で胎児(七ヶ月)を処理する。その後千代は出版会社に定年まで勤務する。退職後、満州時代に関わった中国の地、二日市保養所があった周辺と引き揚げ港があった博多、そして「わたしの赤ちゃん」がいるであろう恐山を旅する。

2

大学時代に雑誌に投稿した作品が「文学性がない」と批評され、鈴木はそれ以後18年間文章を綴ることをしなかった。

3

他の2冊(下記の本)は自分史ではなく、文章や自分史の書き方などについて書いた本である。

『文集づくり本づくり』(日本エディタースクール出版部、1984年)

『自分史』(日本エディタースクール出版部、1986年)

よって、本稿では自分史作品である4冊を研究対象とした。

他には、財団法人日本女子社会教育会『女性の学習の歩み』に実践・研究レポートを投稿し佳作となった

「「書くこと」の道程(みちのり)から—自分史学習を中心として—」(平成12(2000)年)がある。

北九州市自分史文学賞の審査員の考え方は決して一枚岩ではない。特に自分史作品の「虚構」に対する考え方には、かなりの個人差が見られる。その点をこの章で明らかにしておきたいと考える。

北九州市自分史文学賞は、「体験を中心に自らのあり方を綴ったもの、又は、自分自身に大きな影響や感銘を与えた人物（肉親、恩師など）の生き方を描いたもの」⁴を募集対象にしている。

審査員は、三名体制である。第1回から第17回まで三浦朱門が審査委員長をつとめ、その後柴田翔（審査員）と交代している。女性の審査員が常に一名入っている。佐木隆三は唯一第1回からすべての回の審査員をつとめている。『わたしの赤ちゃん』の受賞は第18回であり、そのときの審査員は柴田翔、岩橋邦枝、佐木隆三の三氏である。

審査員は自分史作品における「虚構」について、どのように考えているのであろうか。柴田と佐木の二人について見てみたい。

柴田は「自分史という以上はフィクションであってはいけない、ないのが自分史である」⁵という考えを示している。一方佐木は「虚構をもって真実を語る」「自分の全く経験してない、うそつばちを書くというのはもちろん自分史ではない」が、「何かを表現するときには、どうしても省略しなければいけない、ある部分を肥大化させて誇張しなければいけないこともある」⁶「自分史であっても、構成上のフィクションは許容される」⁷と述べている。このように審査員の中で、自分史の虚構に対する考え方が二つに割れていることが分かる。

『わたしの赤ちゃん』は第18回の大賞を獲得したが、審査は難航したようである。その理由は、第17回まで審査委員長を務めていた三浦朱門に替わって柴田翔が審査委員に加わったことにある。三浦は自分史は「一種の小説」⁸という考え方に立っていたが、柴田は「自分史はフィクションであってはいけない」という立場を取っている。審査の経緯は公表されないので詳細は不明だが、柴田はこの作品をフィクションと考えたのではないかと推測される。審査員三氏の内、意見が真っ向から対立している柴田、佐木両氏の審査評は次の通りである。（引用文の下線は、すべて筆者による）

柴田翔

（前略）a 佐木選考委員の尽力により、架空の想像力で書かれたものではなく、作者の長年の知人からの直接的な聞き書きであることが確かめられた。また聞き書きも本文学賞の対象とするのには、前例があるそうである。b 私はいろいろな理由で必ずしもこの作品を支持できなかったが、（中略）最終的には他の二委員の意見に賛同した。確かに敗戦も遠くなり、世代が交代して、引き揚げの実態も忘れられつつある。c ただ、聞き書き取材による自分史文学は、この作品あたりがざりざりの線だという感想はやはり否めない。（後略）（『わたしの赤ちゃん』p.173）

佐木隆三

（前略）d わたしは鈴木政子さんに、「よく書いてくださいました」と、心から感謝している。あなたが書かなかつたら、「高橋千代」の筆舌に尽くしがたい体験は、

4

「森鷗外」記念事業 第21回北九州市自分史文学賞 作品公募より

5

平成7（1995）年2月、北九州市・北九州市教育委員会主催で「自分史文学を育てるために」というパネルディスカッションが開催された。パネリスト四人の中に柴田翔と佐木隆三が含まれている。これは、そこでの発言の一部である。吉澤輝夫編『現代のエスプリ自分史』（至文堂、1995年）p.135

6

同 pp.135-136

7

須嘉恵著『大坂町筋鳥町通り』（学習研究社、2007年）p.145

8

第2回自分史文学賞「講評」で三浦は自分史について次のように語っている。

自分史という、だいたい二つのタイプに分けることができる。

一つは文字通り、自分の過去、自分が体験したことを書いたもの、もう一つは自分と深いかわりのあった人のことを、自分の記憶と調べたことを混ぜて書いたもの。第一のタイプは老人に多いのは当然である。（中略）

第二の自分史は尊敬していた人、あるいは自分が愛していた肉親の、苦闘の生涯を記述する、といったものが多い。これはもう一種の小説である。近年、ノンフィクションという文学のジャンルができたが、ノンフィクションと歴史小説とどう違うか、と考えてみると、その差はほとんどない、といつてよい。従って第二の類型は、いわゆる調べて書く小説の一種である。第一の類型でも私小説というものがあるのだから、小説の一種と考えてもよいが、私小説の場合は内面の問題を重視するが、自分史に書かれている題材はどちらかというと、特異な事件や体験を中心にする傾向がある。

ヤスコ・ハート『一生に一度だけの』（学習研究社、1992年）pp.233-234

歴史の闇に消えてしまった。(中略) e 自分史の創設にかかわり、第一回から今回まで審査員をつとめたものとして、あらためて「よく書いていただきました」と申し上げたい。(同p.179)

柴田翔の審査評の下線 b で明らかなように、柴田の『わたしの赤ちゃん』に対する評価は高くない。下線 a の一文が具体的に何を指しているのか、この賞の下読みをしている人物に尋ねてみた。その人によると、「佐木氏は、審査の場で、これがすべて事実であることを実際に刊行済みの資料を示して説明した」という。その資料は、佐木自身で収集したものだそう⁹。鈴木政子に取材したとき、鈴木は「佐木さんに『満州そして私の無言の旅』をお渡ししてある」と言っている¹⁰。佐木自身で収集した刊行済みの資料が、鈴木著『満州そして私の無言の旅』であったかどうか、これ以上のことは調べようがないが、結局柴田が折れた形で『わたしの赤ちゃん』が大賞を獲得したことは間違いない。柴田翔の審査評の下線 c の文章を読む限り、柴田はこの大賞に納得しているとは考えにくい。

一方、佐木隆三の審査評は、ただただ絶賛で、自分の与えられた紙面(3ページ分)全部を『わたしの赤ちゃん』評のみで終わっている。(審査評は普通、最終審査に残ったすべての作品にコメントをする)しかも下線 d、e 部分に示されたとおり、「よく書いていただきました」という感謝の言葉を二度繰り返し書いているのである。

もう一人の審査員・岩橋那枝は「他人の体験を取材して書いて自分史といえるのか」と疑問は呈したが、「作者が千代と一体になった自分史だ」と評価している¹¹。

9
事情により、下読みをされている方の氏名は伏せる。平成22(2010)年にメールで問い合わせ、お教え頂いた。

10
平成22(2010)年2月11日、鈴木氏への聞き取り調査を行った。そのときに、鈴木氏より伺った内容である。

11
『わたしの赤ちゃん』pp.174-175

3. 『わたしの赤ちゃん』における「虚構」の意味

審査評を読む限り、審査員三人ともがこの作品を「女性たちの悲惨な戦争体験」を書いた作品という認識に立っている。また著者・鈴木政子自身、今まで書くことができなかった収容所におけるソ連兵の暴行を書くことが「生かされた私の役割」である、と『わたしの赤ちゃん』の「あとがき」ではっきり書いている。大賞受賞から約一年後に書かれた「「まさこ」の最終証言です」(2009.5.10記)という原稿¹²には、次のように書かれている。

12
鈴木政子氏への聞き取り調査の際、鈴木氏の好意により、その原稿を見せて頂いた。

数年、想いをこめていたが、七十代に入ったわたしは、どうしても書かずに死ぬことはできない。闇に葬ってはならない。日本が侵略国家であったことも、引揚者という言葉さえ知らない世代がいる。このようなことを含め、今まで書いた旧満州での体験の集大成をしよう、と筆を執った。この作品が『わたしの赤ちゃん』(学研発行)である。

この原稿の中で「ソ連兵や中国兵による強姦」について、当時、意味ははっきりとわからない年齢ではあったが、「目前で行われたことは強烈な思いとなり消えない」と語っている。しかし当事者である女性たちは、悲惨な事実をひきずりながらも、決して

話すことはできないのである。「だから、わたしが代わりに書いたのです」と叫びたい！」鈴木は資料を調べ、全国で取材を続けた末に、『わたしの赤ちゃん』として世に問うたのである。ところが、鈴木が以前に書いた『満州そして私の無言の旅』と比較してみると、『わたしの赤ちゃん』に「虚構」が施されていることは明白である。なぜ「虚構」が必要であったのだろうか。この章では、『わたしの赤ちゃん』と「虚構」の関係を考察したいと考える。

鈴木政子の著書『満州そして私の無言の旅』は、文字通りの自分史で、鈴木半生の半生記が書かれている。微々たる相違はあるようだが、ほぼ、事実であると見なすことができる。『満州そして私の無言の旅』と『わたしの赤ちゃん』を比較することにより、『わたしの赤ちゃん』という自分史作品の構成が明らかになるが、本稿では作品の構成の詳細は省略する。

『わたしの赤ちゃん』は大きく分けて「渡満から敗戦(大虎山収容所到着)まで」「大虎山収容所生活から引き揚げまで」「戦後の生活」の三つの部分で構成されている。それぞれを注意深く読んでいくと、『わたしの赤ちゃん』の主人公・高橋千代の輪郭がはっきりしてくる。まず「渡満から敗戦(大虎山収容所到着)まで」であるが、これはお手伝いさん「節子」をモデルにしている。時代は飛ぶが、「戦後の生活」の叙述は、鈴木政子本人の人生とほぼ重なり合っている。つまり、戦後は著者である鈴木本人の自分史なのである。それでは「大虎山収容所生活から引き揚げまで」の、鈴木が一番書きたかった「女性たちの受けた戦争被害」の部分のモデルは誰なのであろうか。それは『満州そして私の無言の旅』との比較だけでは解明されない。『満州そして私の無言の旅』は昭和62(1987)年に出版されている。ところが翌年の昭和63(1988)年に一つの出来事が起こっている。その年、鈴木の子が急逝する。その告別式に「高橋千代」の弟が参列していて、鈴木に「姉も東京で、政子さんと同じような仕事をしています。会ってやっていただけますか」と声をかける。これがきっかけとなり千代と再会し、千代の勧めもあって『わたしの赤ちゃん』を執筆することになる。つまり、「高橋千代」という人物は確かに実在するのである。敗戦から引き揚げまでの箇所は、実在する「高橋千代」の実話をもとに、後の聞き取りで得た証言と、鈴木一家の引き上げ体験を加えて記述しているのである。

以上のことから『わたしの赤ちゃん』の主人公・高橋千代は節子、高橋千代(実在の人物)、鈴木政子の三人を合体して創作されたことが分かる。しかしここで一つの問題が浮上してくる。著者が言うように、「千代たちの悲惨な戦争体験」を書きたかったのなら、自分史には「聞き書き自分史」¹³という表現方法があるのであり、その方法を用いて、高橋千代の半生を書けばよかつたはずである。「聞き書き自分史」という表現方法があるにもかかわらず、なぜ「千代」と「著者」の人生を合体せねばならなかつたのか、という疑問に突き当たる。

実は『わたしの赤ちゃん』のあとがきは、書き直しがされている。この点は注目に値する。最初の原稿の半分以上に「修正をお願いします」という指示が入っており、「あとがき」は大きく書き直されることになる。修正前の原稿から、「昭和63(1988)年」という年が浮かび上がってくる。前述したが、この年に鈴木の子が急逝する。その告別式に高橋千代の弟が参列していたことがきっかけとなり、千代との再会が

13

高齢者や何らかの事情で自分では執筆できない人から聞き取りをし、それを文章化して、1冊の自分史を作成する方法。

実現し、『わたしの赤ちゃん』の執筆へと向かうのである。「昭和63(1988)年」にはもう一つ大切な意味がある。それは、父親が死亡し、もはやこの世に存在しないということである。鈴木は若い頃から父親と確執があったが、父の死の前後に「父との和解」が成立したと考えられる。このことをふまえながら、鈴木が『わたしの赤ちゃん』という作品を書かねばならなかった意味を考察する。

鈴木が『わたしの赤ちゃん』を執筆したのは「戦争体験の継承」、特に今まで間に葬り去られていた「女性たちの悲惨な戦争体験」を書き残すことにあったということは間違いない。鈴木政子自身、「この事実は、若い人たちにもしかり伝えることが、生かされた私の役割」¹⁴であると述べている。まさに「戦争体験の継承」がこの作品のモチーフであったといえよう。しかし戦争体験継承への強い意欲は、鈴木本人のつらい戦争体験が原点にあったればこそそのことなのである。

14
『わたしの赤ちゃん』p.168

満州時代、小学校四年生の鈴木に一家の生計がまかさされていた。本人に対する負担の大きさは容易に想像できる。その頃、七歳の弟・満はジフテリアに感染し、もう二、三日の命と言われていた。その弟の前で、負担に耐えられなくなってしまった鈴木は、「みっちゃんが病気になってしまったからみんなが苦しむのよ。みっちゃんなんか早く死んじまえばいいんだ。」¹⁵と泣き崩れてしまうのである。この一言を言ったことに対する自責の念が、「戦争体験の継承」をライフワークにするに至った大きな原動力となっている。

15
『あの日夕焼け』p.116

満州で筆舌に尽くしがたい体験を強いられた鈴木政子一家は、無一文で命からがら日本へ引き揚げてきた。そして長男だった父親の喜多方の実家に身を寄せる。鈴木の両親は教員だが、母親は教員をやめ、長男の嫁として生きる道を選ぶ。しかし厳しい舅に仕える母親は、ただ堪え忍ぶつらい毎日だった。明治18年生まれの舅にとって、神国・日本が負けるなど、天地がひっくり返ったような出来事である上に、満州で富を二、三倍にして帰ってくると思っていた長男一家が、見るも無惨な姿で実家に転がり込んできたのである。当然嫁に対する態度は厳しいものになる。「何もかもなくして来やがって——、厄介者めが」という舅の言葉を、母親は二十年間聞いて暮らすことになる。父はそれに対して見て見ぬふりをし、深酒をするようになる。鈴木は傍観する父親に不信感を抱く。「祖父母と母とのかかわりからも、深酒をする父親のもとからも逃げたかったのだ。」「その時上京して以来、わたしは家に居つこうとしなかった。」¹⁶家庭内のごたごたに嫌気が差した鈴木は家を離れてしまうのである。

16
『満州そして私の無言の旅』p.172

父との確執は、鈴木婚約破棄により決定的となる。一流大学出身で一流企業に勤めている男性とお見合いし婚約するが、その婚約者には別に恋人がいることが発覚する。婚約者としてすでに肉体関係があった鈴木は、それが原因で自殺未遂をしてしまう。「わたしはすでにいわゆる「傷もの」になっていた。現在とは違って、世間で許されることではない。一生、結婚もできないし、家の恥にもなるだろう。弟や妹の縁談にもさしさわるかもしれない。」¹⁷と述べている。家父長制のしっかりした家に育った鈴木は、「傷もの」「家の恥」という考え方から自由にはなっていない。しかし同時に、その重みは全く違うにしても、高橋千代たちの悲惨な体験(女性に対する性的な戦争犯罪)への強いシンパシーとなったと考えることができるのではないか。

17
『舎監せんせい』p.143

鈴木は父親に婚約の解消を申し出、父親はそれを承諾するが、たった一日家に泊め

ただけで、娘を追い出す。家を出された鈴木は、仕事を持ち、自立せざるをえない。鈴木作品には「仕事のなかで生きてみよう」「仕事の中で生きる」(『舎監せんせい』p.149)、「いずれは「月給取り」に」(『わたしの赤ちゃん』p.10)、「給料取りになって、ひとり立ちする自分の姿を描いて胸が高鳴る」(同p.14)、「「給料取り」になりたい」(同p.81)などという表現が出てくる。

「昭和63(1988)年」という年の重要性を前述したが、『満州そして私の無言の旅』は昭和63(1988)年以前の昭和62(1987)年に出版されている。一方自殺未遂について記述している『舎監せんせい』と『わたしの赤ちゃん』は昭和63(1988)年以降に書かれている。昭和63(1988)年以前と以後では、父親に対する書き方が、微妙に違ってくる。『満州そして私の無言の旅』では、父親に対する感謝の言葉も書かれているが、全般には父親に対して批判的である。舅に厳しい言葉を浴びせられる母を守ることもせず、酒におぼれ、見て見ぬふりをしてきた父親への不信任は強い。鈴木が中学生の頃のことである。母親が舅に酷く叱られ、裏口を飛び出して水があふれるように流れる川の中に入っていったことがあった。鈴木は母親の後を追いかけて、必死に母親の身体をつかんだという経験を持っている。そのとき母親が叫ぶように言った「死なん。まだ死ねん。でも、政子。水の中に入れるだけ入れてくれ。そしたら気が済むかもしれん。早くあの子たち(満州で亡くした子どもたち一筆者注)のところにいって、楽になりたい。だが、まだ死ねんなあ。おまえたちがいるもの」¹⁸という言葉が、今でも鈴木の子の底に残っているという。

一方『わたしの赤ちゃん』を見てみると明らかに父親との和解が読み取れる。病気の父親を故郷に見舞う場面である。

「千代、aよう生きてきたな。とうちゃんはお前がむずさくて(かわいそうで)、むずさくてなあ。bでも同情しては、お前がふんばれないと思ったんだ。つらいこともあったよなあ。cあの世にいくまえに、あやまっておかないといかんと思ったんだ。ごめんなあ、千代。(後略)」(p.118)

父親が何に対して娘に謝っているのか(下線c)本文中では触れていないが、下線a、bの父親の言葉から推測される。それは、娘の満州行きを認めただけに満州で苦勞をすることになった娘に対しての詫びと、娘を思えばこそ冷たくしたことに対する詫びと考えるのが自然であろう。しかし、鈴木他の作品を読み比べてみると、婚約解消を頼みに戻ってきた娘への冷たい態度に対する詫びとも読み取れる。鈴木は「あやまることなんかないよ」と父親に言葉を返す。ここに至り、鈴木父子(というよりも、鈴木自身)は長年のわだかまりを捨て、和解したのである。

3.で「聞き書き自分史という表現方法があるにもかかわらず、なぜ「千代」と「著者」の人生を合体せねばならなかったのか、という疑問を提示した。これに対する答えは、『わたしの赤ちゃん』という作品の底流にある「父との和解」というもう一つのモチーフにあると考える。この作品はおそらく、鈴木最後の著作になるであろう。この最後の作品の中で、鈴木はようやく父親と和解することができたのだ。それゆえ、この作品を聞き書きという形で、「女性たちの悲惨な戦争体験」を描くだけにとどめることは

できなかったのである。

人物の合体に関してはもう一つ、現実的な理由があったことも見落とすことはできない。『わたしの赤ちゃん』という作品はまぎれもなく「賞をめざした作品」であったということだ。『舎監せんせい』で落選した経験を持つ鈴木が、満を持して書き上げた作品が『わたしの赤ちゃん』なのである。鈴木は、自分史は「一種の小説」という考えに立っている三浦朱門審査委員長の自分史に対する解釈に則ってこの作品を書いたと思われる。しかし第18回から三浦に代わり、「自分史にフィクションがあってはいけない」という立場を取る柴田翔が審査委員に加わった。そのため、審査は難航したが、鈴木は念願の大賞をこの作品で手中に収めることができた。

『わたしの赤ちゃん』という作品は、文字通りの自分史とは違い、虚構性が強いことは否めない。鈴木自身が解決せねばならなかったもう一つのモチーフ「父との和解」をこの作品内で成し遂げるための舞台装置が、「三人の人物を合体させて一人の主人公を創作する」という「虚構」であったと言えよう。

それでは一般的な自分史における「虚構」とは何なのか。虚構の許容範囲はどこまでなのか。次の章で考えたい。

4. 自分史における「虚構」

自分史を書く場合、虚構は許されるのか、という問題がある。自分史はドキュメンタリーであるので、あくまでも事実を書かなければならない、という立場と、ある程度の虚構は許される、という立場とがある。虚構を許さない立場の場合、自分史の「史」にこだわりがあるのではないか。自分史は自分の歴史であるのだから、事実を書く必要がある。それに対して虚構を認める立場は、事実よりも真実に重きを置いていると考えられる。2.で言及したが、北九州市自分史文学賞審査員に関して言えば、虚構を許さない立場には柴田翔、虚構を認める立場には三浦朱門、佐木隆三がいる。

自分史は、一代記・半生記の形式であっても、戦争・闘病などのテーマを設定して書いたとしても、自分自身の記憶をもとに書いていることには違いはない。まさに自分史とは、「記憶を文章化する」作業なのである¹⁹。

自分史には大きく分けて「記録としての自分史」と「物語としての自分史」の二つがある。「物語としての自分史」は、3.で考察したが、過去の出来事や経験をできるだけ正確に再現することを目的としている「記録としての自分史」には虚構性はないのであろうか。

自分史の意義として、個人的な体験の記録があげられる。たとえば、シベリア抑留記、従軍看護婦の記録、癌闘病記、高度経済成長期における企業戦士の毎日の記録などである。どの作品も貴重な記録・かけがえのない体験であり、歴史的資料ともなり得る。しかし多くの場合、何十年もたった〈いま〉、〈あのとき〉のことを書いているのであり、自分の「記憶」が大きなよりどころとなる。それゆえ自分史を考える場合、「記憶」は一つのキーワードとなる。ここでは「自伝的記憶」から自分史における虚構の問題を考えてみたい。

19

『虹』第四号の巻頭言「記憶のありか」の冒頭、吉村登は次のように書いている。

「自分史を書く」ということは、記憶を文章化することに他なりません。本稿ではこの吉村の表現「記憶を文章化する」を使用した。

20

榎本博明『〈私〉の心理学的探求 物語としての自己の視点から』(有斐閣、1999年) p.80

自伝的記憶というのは、自己にまつわる記憶、自分の人生を構成する記憶のことである²⁰。自伝的記憶は「現実起こったことのコピーではなく、後になって再構成されたもの」と言える。言い換えれば、想起する時点、すなわち〈いま〉の自分の視点から自分自身の過去を新たに創り上げていくのである。そもそも過去の記憶は断片として存在している。その断片の記憶の間に、想像力で作られた新たな記憶をはめ込み、一連の自己物語を創造することになる。自分の記憶の中に他者の記憶が入り込むこともある。

記憶というものは断片にすぎない。自分史を書く場合、記憶を補うために、あるいは記憶違いを正すために、年表や当時の資料を使ったり、もし残っていれば、日記、メモ、写真なども利用したりする。しかしそれらも断片にすぎない。記憶の断片をつなぎ合わせて一連の自己物語を作り上げるとき、そこに「虚構」が入り込む余地が生まれるのである。

21

榎本博明『記憶は嘘をつく』(祥伝社、2009年) p.206

また「自伝的記憶とは、生まれて以来の自分の来歴を説明する記憶であり、自分が自分であることを保証する記憶」²¹であるとする、自分史の一代記はまさにこれに相当する。そもそも自分史、とくに一代記を書く人々の多くは、成功者あるいはそこまで行かないまでも納得のいく人生を送った人が多い。自分史を書こうとしている〈いま〉の視点で自分の過去を解釈する。そして「自分のアイデンティティを補強するような方向へと、想起する内容は歪んでいく」²²のである。つまり、サクセスストーリーを強固なものにするために、自分の人生を正当化するために、そこに大げさな表現やときには「虚構」が入ってもおかしくないのである。

22

榎本博明『〈私〉の心理学的探求 物語としての自己の視点から』(有斐閣、1999年) p.116

自分史の現場(自分史教室など)では、自分史はありのままの事実を書くように指導するのが一般的である。

23

田上貞一郎『自分史の美学とタブー』(近代文芸社、1997年) pp.241-242

■虚構は自分史に不可欠だ(前略) その一つに高校時代のスキャンダルがある。担任の女教師と恋に陥り、自殺未遂までに発展している。本人はもちろん、相手の女性も存命なので、設定を変えている。もう一例は軍隊の体験談。中国人の集落を襲い、略奪し放火したという。万一、国際問題化したら大変と悩んだ筆者は、この記述を戦友から教えられた「伝聞」として処理した。

虚構であれば、私小説である。どちらも厳密にいえば自分史から逸脱したことになるが、この手の虚構なら許されるべきである。

自分史とはいえ、善意の虚構は不可欠である。

たとえば自分史講師・田上貞一郎は、「虚構があれば、私小説である」と明言している。ただし「善意の虚構」は認めている。田上の言う「善意の虚構」とは、自分史の中で書かれている人物の立場を思いやって設定を変えたり、書かれている内容が社会的に問題になりそうなときに婉曲な表現を取ったりする、ということである²³。

同じく自分史講師の吉村登は、「自分史はその人が実際に体験した事実だけを書くもので、行ったことのない場所や、会ったことのない人や経験したことのない出来事を書いてはいけません」と虚構を認めない。(ただし会話部分の描写は例外としている)²⁴

24

吉村登『楽しみながら書く自分史【改訂版】』(愛知書房、2004年) p.98

一言半句を違わず再現するのは録音でもない限り不可能です。しかし、その場を描写的に描こうとすれば、会話は欠かせません。そのときのやり取りはきつとこんなだったろう……。

そこまでは土俵(自分史の土俵一筆者注)の範囲内です。

上記の考え方に則った場合、『わたしの赤ちゃん』はその許容範囲内の自分史作品と考えてもよいのであろうか。やはりこの作品は、許容範囲を超えていると判断せざるをえない。すなわち、一般に考える自分史の範囲を逸脱した、小説の域に足を踏み入れた作品と言えよう。鈴木は「この本に書かれていることはすべて事実です。嘘はありません」と断言する。しかしたとえ一つ一つの事柄が事実であっても、三人の人物を合体させて一人の人物を創作した段階で、この作品は自分史の範囲を大きく逸脱してしまったのである。なぜなら、この物語の主人公・高橋千代は、実在しないからである。

おわりに

本稿では「物語としての自分史」の例として『わたしの赤ちゃん』を分析した。この作品は自分史の臨界を越えた作品であり、自分史の中でも特殊なものといえよう。しかし程度の差こそあれ、「物語」としての自分史には虚構性が見られる。また「記憶を文章化する作業」である自分史は、それがたとえ「記録としての自分史」であったとしても、「虚構」を全く否定することはできない。なぜなら、自分史を書くときの記憶＝自伝的記憶そのものが、〈いま〉の自分の視点から過去を新たに創り上げるという性質を持ち合わせているからである。

自分史は、自分の人生を振り返って書くものである。過去の〈あのとき—あそこ〉で起こったできごとを、〈いま—ここ〉に再現する。立ち位置はあくまでも〈いま〉であり、決して過去の時点にさかのぼって書いているのではない。書いている〈いま〉の時点での自分の物語に沿った人生が、紡ぎ出されていくのである。一つの事実を誇張して書いたとしても、また自分にとって公にしたい事柄を書かなかったとしても、それは〈いま〉、この時点で書いている著者の真実なのである。自分史における「虚構」は、作り話という意味の虚構ではない。真実を描くために、自分の歩んできた人生や自分に起こった様々な出来事を省察し、「再構成」を試みる、という意味なのである。自分史というジャンルにとっての「虚構」は、「真実を描く手段」であるといえよう。

自分史を書くという行為は、少なからず読者を意識しているということでもある。自分史を書く人たちは、自分の書いた作品を多くの人に読んでもらいたいと願っている。しかし自分史のほとんどは自費出版であり、一般の人に読んでもらうことを望んでも、現実には非常に難しい状況にある。それゆえ自分史の読者は家族、知人にほぼ限られるのが現状である²⁵。たとえ狭い範囲であっても、作品を読んでもくれる読者のことを考えたとき、自分史はなるべく読んでおもしろいもの（読むに堪えられるもの）でなくてはならない。事細かに事実のみが羅列された自分史を読んでも、著者の顔は見えてこないし、それ以前に読む気が失せてしまう。記録としての価値を見出すとしても、そういう自分史はおそらく資料としての価値にとどまるであろう。自分史を読んでもらいたい人たち（想定する読者）が、読みたいと思う形式で書くことが読んでもらうための必要な条件となる²⁶。そうであるならば、ただ事実を羅列するのではなく、文章に減り張りをつける必要が出てくる。膨らます部分と切り捨てる部分の選択である。やや大げさな表現を使ったり、シチュエーションを少し変えたりすることにより、読み物としてのおもしろさが出てくるとしたら、それは「虚構」の許容範囲であろう。

自分史を書く場合、表現方法として、会話文（カギ括弧）は効果的である。自分史では失敗談は好感を持ってわかえられるのだが、苦労話や自慢話は敬遠されがちである。そういうとき、会話文を利用すると嫌みなく筆を進めることができる。実際には存在しない人物を会話に登場させたり、会話文の内容を多少創作したりしたとしても、それは自分史の許容範囲とみなしてもよいであろう。

場面の書き換えと会話文という二つの例をあげたが、読者を意識したとき、このような「虚構」もまた、自分史には必要なのである。

25

現在の状況では、一般の読者獲得の最も有効な場は自分史コミュニティ（自分史友の会などのサークル活動）である。最近では「自費出版図書館」「自分史図書館」などに寄贈する人も多くなったが、これらの図書館の蔵書は一般の人にほとんど利用されていないのが現状である。

26

なだいなだは「メディアを持たない人々の表現——どこに書くのかの問題」の中で、書くことと読者との関係について触れている。活字というコミュニケーションは、読みたいという人がいて初めて書くことに意味が出てくる。けれども読みたいという人たちが好む形式で書かなくては書いたものを読んでもらうことはできない。書きたいことを選ぶのは「書き手」であるが、その形式を選ぶのは「書き手の頭にある読者」である、という意味のことを述べている。（『岩波文学1 文学表現とはどのような行為か』、岩波書店、1975年、pp.305-307）